
植物

ハイキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

植物

【Nコード】

N2986J

【作者名】

ハイキ

【あらすじ】

人々が植物に見る、夢と幻。

植物（前書き）

過去に書いた短編集です。それぞれ書いた時期に空きがあるためブレが見られます。この物語は完結しませんが、新たに追加される可能性はあります。

植物

ある科学者が、食べ物がなくても太陽の光だけで生きていける葉を開発した。

その後世界中の餓死は全てなくなったが、なにもしなくても生きていけるので、人々は働かなくなってしまった。

ついにはみな動こうともせずただひたすら太陽を眺めているだけとなり、次第に身体の機能もそれに合わせて退化していった。

何億年も経って、それを私たちは植物と呼ぶようになった。

世界はどんどん縮小されていってるのだと、誰かが言った。

誰も気づかないほど緩やかに、何億という途方もない時間をかけて。

この説を発表した植物学者のウェレンガー博士はその次の日忽然と姿を消した。

そして再び人々の前に姿を現したのはそれから4年後のことで、しかし残念ながら無事ではなかった。

博士は王国の北に広がる森のすぐ外に遺体で発見された。

地面を這った跡が森の中から続いていて、調査隊がそれを辿ると博士の靴やペンが見つかった。

さらに奥へ行くと這った跡の前はかすかな足跡で、それがずっと奥まで続いているようだった。

しかしそれ以上先を知ることができなかった。

王国は国民の森への立ち入りを禁止している。森は危険だ。奥へ行けば死んでしまう。

長年の間呪いだの魔女がいるだの言っただけで森を避けてきたが、近年はもっと現実的で説得力のある説が発表された。

森の奥から、人体に有害な成分をもつ孢子が漂ってきていると言うものだ。

しかし森はどこまで続くのかわからないぐらい途方もなく深く王国のある場所まで孢子は届かない。

だから森に手をつけさえしなければ安全だ、と彼らは言った。

ある日、ひとりの娘が王国の研究所を訪れた。

彼女はミナミという名で、亡きウェレンガー博士の孫娘だった。

ミナミは何冊もの使い古されてボロボロのノートを研究者のひとりに渡して言った。

「祖父の書斎からでてきた遺品です。読んでくださればわかると思います」

研究者はその場でノートをひらき、断片的に読み、そして驚愕した。ノートには博士の研究記録やこまごまとした日記のようなものが記されていたが、驚くべきはその内容だった。

描かれている数々の植物のスケッチは、誰も見たこともないような奇妙な姿で、しかもその生態まで詳細にメモされている。

日記には macno という人物との会話記録らしいものも混じっていた。

またある日の日記によれば、それらの奇妙な植物や macno という謎の人物は、展望野原という場所に存在していて、その展望野原という場所は例の北の森を抜けた場所に在ると言うのだ。

研究者は愕然として、ミナミに問いただした。

「はい、祖父は私にいろんなことを話してくれました。祖父の亡くなった今、全てお話しします。

祖父は幼い頃遊んでいる時に森へ迷い込んで、九死に一生の体験をしました。

当時は誰もまさか胞子のせいだなんて思ってませんでしたから、適切な処置をとられることはなく、後遺症が残って少し身体が不自由だったのは今では有名な話だと思います。

けれど、後遺症はそれだけではありませんでした。

あの森の奥から漂う胞子に対する、強い耐性ができていたんです。気づいた祖父は、誰にもそれを明かそうとはしませんでした。

若い頃から植物に対する興味は並々ならぬものだったのだと思います。

祖父は身についた耐性を利用して、人知れず森の中へ出かけるようになりました。

森はとても深いと言われていますけど、あの胞子が濃くなるあたりから先はそう長くはないんです。

森を抜けると、野原があったそうです。野原には見たこともない植物が生い茂っていて、その向こうは崖があって、空と海の境界線が見えて、生い茂る植物の中で存在を主張する大木と、その根元にはボロ小屋がありました。

そのボロ小屋に住んでいたのが、macnoという人物です。

祖父は驚く暇もないぐらい興奮したそうです。今でも、興奮気味にこの時の話をする祖父の顔を思い出します。

macnoは白衣を着込んだ研究者のような風貌で、ボロ小屋も足の踏み場がないぐらい書物が散乱して、まるでそこが昔研究所だったかのようなだったと聞きました。

ふたりはすぐに打ち解けて、いい友達になりました。

と言っても、macnoは口数も少ないし、ほとんど動かずに外で

日向ぼっこをしているだけです。

それでもたくさんのかたを話してくれたそうです。詳しいことはノートに書いてありますけど。

その、私もノートを読んでみたんですが、中でもとても気になったこととお話しようと思います。

今回・・・祖父が亡くなった原因にも繋がるであろう話です」

ミナミは一度そこで言葉を切った。

目の前の研究者はただただ信じられないというような顔で彼女を見ている。

「macnoは何も食べません。毎日日向で本を読んでいるだけでした。

そのことが気になった祖父が聞いてみると、彼は説明してくれました」

彼女はノートを手に取ってページをめくり、読み上げる。

「ある科学者が、食べ物がなくても太陽の光だけで生きていける薬を開発した。その後世界中の餓死は全てなくなったが、なにもしなくても生きていけるので、人々は働かなくなってしまった。ついにはみな動こうともせずただひたすら太陽を眺めているだけとなり、次第に身体の機能もそれに合わせて退化していった。」

“私は確信した。この野原は旧世界だったのだ。この見たこともない植物たちはこの世界で生きていた人間だったのだ。彼はただひとり人間の姿を保っている旧世界の人間で、枯れることもなくここに佇んでいる。”

“身体が動かないという恐怖に打ち勝ったら、私も仲間入りできるだろうか。”

・・・・・・祖父は、何十年にも渡る展望野原の研究の末、胞子の有害性に名前をつけました。人体植物化、とだけ聞いています。ただ祖父がmacnoに聞いた話のように太陽の光だけで生きていけ

るような身体になるのではなく、どんどん身体機能が働かなくなるだけの有害なものでしかないそうです。

恐らく、祖父は行方不明になっている4年の間、ずっと展望野原にいたんでしょう。

もしかしたら自分も彼らのようにそこで日の光を浴びて生きられるかも知れないと思ったのかも知れません。

けれど・・・無駄だったんでしょうね。

限界を迎えた身体で、ただ誰かにその存在を知らせたい一心で這い出てきた。

祖父は息絶えてしまいましたけど、祖父の死を目の当たりにした私は、このことを誰かに話す決心ができました。

祖父の書斎をひっくり返して研究記録を漁ったり、日記を読んだりする勇氣も。

とても信じがたい話だと思います。けれどもしあなだが、この話を少しでも信じてくれるなら、誰かにこのノートを見せてください。

お願いします。これが祖父の生きた証なんです」

そう言いながらテーブルにノートを置き、席を立つ。

研究者はただ頷くことしかできなかった。

「失礼します」

ミナミは丁寧な頭を下げ、部屋をあとにした。

病氣

虫の音がする昼下がり。

誰もいない町を抜けると、少し外れたところに一際目を引く建物があつた。

それは手入れのされていない木々に紛れているけど、とても大きい。入り口は板で塞がれていたから、僕は裏へ回り込んだ。

誰かの話し声がする。誰かいるんだ。

この建物は中庭をまあるく囲うような形だった。

声のする方へ向かうと中庭に続く低い扉があつて、そのむこうに人影が見えた。

白いシャツをだらしなく着た男で、何か地面にたてられたものの前に座つて、ぶつぶつと喋っている。

僕はそつと聞き耳をたてた。

「なあ、今日はさあ隣町まで買出しに行つたんよ。

この町に人がいなくなつて大分経つからさ・・・でも俺はこの町から出て行かないよ。

だって俺がいなくなつたらさ、お前独りぼっちだもんな。こんな寂しいところで誰にも見つからないでさ」

彼は独り言を言つてゐるだけのようだったが、僕には見えていた。

座り込んでただひたすら喋る彼を、じつと見てゐる赤い瞳の男がいる。それが意志体なんだということは一目でわかつた。

透き通つた体は薄暗いもやをまといふわふわと宙に浮いてる。

彼には見えてないんだろうか。

そのまましばらく見ていると、やがて彼は立ち上がつて、建物の中へ消えていった。

意志体はその場に留まつてふわふわと漂っている。

僕は思い切つて錆びた低い扉を開けて、中庭へ入つた。

気づいた男が僕を見る。少しドキドキしながら、声をかけた。

「あの・・・」

「俺が見えるのか？」

うん、と頷くと、男は何か考えるように目を閉じた。

少しすると目を開けて、僕に言う。

「その花を持っていつてくれないか」

男が指したのは、地面にたてられた墓標の裏。

その陰にひっそりと隠れるようにして、赤い花が咲いていた。

まるで今咲いたばかりみたいに綺麗な花びらをしている。

その色は男の瞳によく似ていた。

言われた通り丁寧に摘んで立ち上がると、男が続けて。

「一階の診察室にいる」

それだけ言うと、これ以上言うことはない、と言うように、ふっと姿を消した。

待ってと声をかける間もなく、仕方なく、手に花を持って建物に入った。

建物の中は薄暗くて殺風景だ。

いったい何の建物なんだろうと考えながら、「診察室」と書かれた札のついた部屋のドアを開ける。

驚いた顔でこっちを見たのは、さっき中庭にいた青い瞳の男だ。

「人間・・・？」

最初に彼の口から出た言葉はそれで、僕が言葉を探して戸惑っていると、彼はもう一度口を開いた。

「中庭から、入ったんだな」

確認をとるようにそう言ったから、僕は出てこない言葉の代わりにうんうんと首をふった。

旅人かなにかかあ？なんて言いながら体の力を抜いて背もたれにだらんとなる。

僕が仲間を探してるんだと説明すると、なるほどねえと顔を起こし

た。

視線は僕の顔から手に移る。

正確には、僕がこの手に持った赤い花に。

「それ、綺麗な花だなあ」

「あ、あの、これは」

「んー・・・なんかさ、あいつのこと思い出すよ」

あいつ？何だろうと聞き返すと、彼は笑った。

「ほら、中庭から入ったんなら見ただろ？ぼつんとたった寂しい墓をさあ。

あれは俺の友だちの墓なんだよ。俺らは幼馴染で、似たような仕事についた。

ここは病院。俺は医者なんだけど、まあ親の仕事を継いだだけっつか。今じゃ人もいないしね。

あいつはちよつとした研究所の研究員。

つつても大したもんじゃなくってさ、日々記録をとって保管して・・・って退屈な仕事だったらしいけど」

なにか、ずっと留めてあった糸が切れたように、彼は喋り続ける。

「俺たちはいい友達だったよ。少なくとも俺としてはね。

ところでそいつと言ったらそりゃもう無愛想で、いつも怖い顔してんのさ。

ひたすら仕事、仕事、仕事。人間それじゃもたないだろ？

だから俺は時々、嫌がるそいつを連れ出して遊んだり、酒を呑んだりした」

「けどそいつ、ある日自分の足じゃ歩けなくなった」

「病気だったんだ。身体がだんだんと動かなくなってく病気。

原因はそいつがいた研究所で研究してた植物の胞子だってさ。ひっでえ皮肉だよなあ？

そいつ独りつきりでさあ、誰も見舞いに来てくれないから、俺はいつつもそいつの横にくつついてた。

俺も暇だったんだな。

こんな寂れた病院に患者なんか来ないし。俺にできることはそれぐらいしかなかった。

手の尽くしようもなかったんだ。どの本を見ても誰に聞いても、治療法はないってさ。

だからひたすら世話だけやいた。あいつは嫌だって言ってたけどそんなの構うもんか。

楽しかったよ。まっずいレトルトをふたりで食べながら、なんでもない話ばかりした。

治しようがないならって酒も呑んだし………そんなときに見たあいつの笑った顔、今でも思い出せるんだ。

でもな、次第にそんなこともできなくなってきた。

病気の進行に伴って喋ることすらできなくなったんだ。

俺の言うことも上の空。頭とか神経がうまく動いてないみたいだった。

晴れた日はベッドから窓の外を眺めてるばかりで、雨の日は起きもしない。

しまいには飯も食わなくなっって、点滴でなんとか生き永らえてるって感じだった。

そんである日……今日みたいに綺麗に晴れた日だったな。

俺が点滴持って病室に戻ってくると、そいつは窓辺に身を乗り出したまま動かなくなってた。

もうさあ、寝てると思うだろ？ふつう。ああ動けるんだ、よかった、なんて思ってた。

でも二度と動くことはなかった。

悲しいと思ったけど、不思議と泣かなかったよ。実感がなかったんだ。

その日のうちに中庭に穴を掘ってそいつの亡骸を埋めた。

どうせ俺はどこへも行かないし。行くところもないから。だったら死ぬまで友だちのそばで暮らしたいだろ。返事がないのなんか、慣れっこだったし……」

語尾を小さくしながら彼はうつむいた。

楽しいと言いつ聞かせるような笑顔。どこか遠くを見る青の瞳。寂しそうにふせるまぶた。

それでも声だけは明るく。

「もしあいつが今もどっかで俺のことを見てるんだとしたら、うざったい男だとか思ってるんだろうな。

なあ、お前に話ができてよかった。

俺はこれからもここににいるけど、お前は仲間を探すんだろ？

それで仲間を見つけて、もしよかったら、俺の話をしてくれないか。いつか俺が死んでも、誰かの記憶の中に残っていれば、消えることなんかない気がするんだ」

うん、と僕は頷いた。

忘れないよ。そう言うとは彼は安心したように笑って、立ち上がる。

「日が暮れる前に行きな。俺はなんか……少し疲れたから寝るよ」
ありがとう。さよなら。挨拶をかわして建物から出た。

中庭にはぽつんと寂しげな墓標と、その横にふわふわと漂う赤い瞳の男。

「あの、もう行くね。さよなら」

僕が声をかけると、男は確認したと言うように、目を閉じて応えた。

そっと、赤い花を墓標のもとに置く。

振り返る背後には、落ちかけた橙色の陽に照らされる大きな影。
朽ちてゆくその中で、彼は、その存在に気づくこともなく。

病気（後書き）

FRAGILEというゲームへのオマージュです。オリジナル作品として問題があれば削除します。

生還

『・・・！・・・しろ！・・・応答・・・ろ・・・』
・バルト！！』

びくりと体がはねて目を覚ました。

一瞬にして正常値を超える心拍。吹き出る冷や汗。詰まった息を吹き返す。

耳元から聞こえるノイズがだんだんと容をもって、俺の頭を叩き起こす。

なんだ？どうした？

まず何をしなきゃならない？

見開いた目が見るのは、濁ったガラスごしの青く透きとおった空。

流れる雲。風に吹かれる木の葉。なんて綺麗なんだろう。ここはどこだ？

跳ね上がった息が落ち着いて、鼓膜をぶっ叩く怒声が頭に流れ込んできた。

「おやじ・・・？」

思ってたより弱々しい声に自分で驚く。

そういえばさっきから息が苦しい。

安堵の溜息が聞こえた。

『・・・何があった？状況を報告しろ』

えっと、と言葉を詰まらせる。

状況と言われても。見えるのは相変わらずの青い空だ。

けど頭を動かして濁ったガラスの端を見ると、黄色いかたまりがあった。

体が動くことに気づいたのはそれから数秒もしないうちで、俺はごろんと転がってから腕をつかって上半身を起こすことに成功した。

分厚い防護服のおかげで地面の感触は遥かかなた。

そうだ、この視界に付きまとう濁ったガラスは防護服の窓だ。地面についた手を見ると防護服の色は黄色だった。

息が苦しいな、と首元に手をかけそうになって、やめる。脱いだらだめだ。

見渡す限り生い茂る草花。これは有害。あれも有害。草花に埋もれながら存在を主張する大木。

切り立った崖、空と海の境界線。

やっと、ここがどこかを思い出した。

転がってる黄色いかたまりに目をやる。俺が着てるのと同じ防護服。それと同じようなものがいくつか、そこらじゅうに転がっている。

「全滅・・・」

無意識にでた言葉だった。

少しの沈黙と、相談するような話し声。

『・・・いいか？よく聞け。』

ボンベの酸素残量が残りわずかだ。お前はひとまず戻れ。報告はそれからでいい』

「待って、みんなを連れて帰りたいんだ！」

『・・・ひとりじゃ無理だ。お前が無事に戻ったら応援を寄越す。だから』

「じゃあ応援が来るまでここに・・・ッ」

『戻れって言ってるだろう馬鹿者!!』

『じきに酸素の残量がなくなる。もつわけがない。わからないのか？任務をぼうに振って、何もかも無駄にする大馬鹿者だって言うなら、好きにしろ』

叫ぶような怒声と続けて降りかかる冷たい声。

子供の頃、研究資料に悪戯書きをした時にもなかったような。

俺は叱られた子共みたいに泣きながら、ごめんなさいとうめいた。

『いいから帰ってからにしろ』

だけどそのぶっきらぼうな返事にどうしてか凄く安心して、涙がとまらなかった。

呆れた声が聞こえてくる。

何泣いてるんだこの馬鹿は。そういうのは帰ってからだろう。と。分厚い防護服のせいで顔を拭えない。ぐちゃぐちゃでみつともないだろうな。

森を戻る前、振り返って、にじんだ視界で、もう一度辺りを見た。見渡す限り生い茂る草花。どれもこれも有害だけど、とても綺麗なんだ。

その中で存在を主張する大木はまるでこの野原の主みたいに堂々としている。

それに今まで見たこともないくらい青く澄み渡った空。その光を反射して眩しい海。

ここは一体どこなんだ？

夢を見てるみたいだと思った。

地面に転がった仲間たちは、石ころみたいに動かない。

ごめんなさい。すぐに戻るから待っていて。

息が苦しい・・・酸素の残量はもう限界だ。戻らなくちゃ。

なんだか怖くて、振り返らないように早足で森を戻った。

背後の野原で、誰かの足音がした。気がしたんだ。

噂話

あのさあ、展望野原って知ってる？ いや知らなくてもいいんだけど。こないだ管理してる資料読んで暇つぶししてたら見つけたんだけどさ。え？ うん。ほら、情報管理部。うん。いいじゃん見てるのはオフィスの中だけだし。そんできその中にパスワードのかかったファイルがあつてさ。こんなロックのかかったファイルなんてどこの立入禁止区域の情報だろうと思ったら、ファイル名は「展望野原」つてだけでさ。気になるじゃん。そうだよ解凍したに決まってるんだろ。見たらどうやらどっかの野原のことなのよ。パスワードかかってるなんてなんかの間違いじゃねえと思つてさ。読んでみたんだがところどころいこい間違いつてわけじゃあないようなのさ。

とりあえずその展望野原とかいう場所のことなんだけど。どことは書いてなかったけどなんやら深い森のむこうにあつて、切り立った崖の上にあつて、広さ的にはちよつとでかい公園ぐらいらしいんだわ。崖の下は海ね。そんで野原つて言うからには草とか花がもうぼうぼうなわけよ。で大変なのはその草とか花でさ、どの本見たつて載つてないような、どんな植物学者に聞いたつてわからないような植物ばかりなんだと。しかもどれもこれも人体に有害な孢子やら物質を出してて、人が生身で入ったら一分ともたないらしいのさ。あ、ところでその野原にはさ、森にある木とは違うすごいでかい木が一本はえてて。その木の下にぼろっちい小屋が建つてるんだと。ん？ まあまあこっからが面白いんだつて。

その資料と別に、展望野原に実際調査にいったやつらの証言とか記録とかの資料があつてさ。中でもものつそい昔の資料があるんだがそれはどっかの国の植物学者が、まだ展望野原なんてどこの誰も知らない頃にそこを訪れて記録した日記みたいなものなんだわ。しかもその植物学者、子供の頃にその辺りに迷い込んで致死量でもない程度の孢子を吸つてからというものの、その有害な孢子に対する耐性

が備わって、なんと生身で展望野原に通ってたって話。そんでその日記から察するに、どうやら展望野原には独りだけ人間が住んでるらしいんだよ。さっき言ったボロ小屋にさ。名前はまくのつつて・・・こんな感じだったかな。うん、macno。そのmacnoって男がまた謎なんだわ。なんでも水は飲むけど何も食わずにただひたすら日向で本を読んだり、野原に寝転がったりするだけでまあそもそもそんな場所に平気で独りっきり住んでるってあたりからして色々オカシイんだけどさ。でもその日記からすると、木の实を食ったりってことはあったらしいから何も食わないってわけじゃないさそうだな。あとは会話記録とかあったぞ。でもそれも取りとめもないどうでもいいことばかりなんだが。だいたい、こっちから話しかけてもほとんど返事がなかったりって感じだったらしい。まあそんな感じで植物学者は生涯かけて展望野原に通ったんだが、どうやら子供の頃に受けた胞子の影響はいいもんばかりじゃなくて、段々と体が動かなくなるっつゝ病氣にかかってたらしいのさ。それである時出かけたまま帰ってこなくなって、見つかった時にゃ冷たくなってたと。だが植物学者の話はここで終わりじゃないんだな。面白かったんで片っ端から日記の内容を読んでみたんだが、なんとmacnoがまともに喋ったことがあるんだわ。その内容は・・・ええと確か。どっかの科学者が食べ物がなくても太陽の光だけで生きていける葉を開発したんだ。その後世界中の餓死は全てなくなっただんだが、なにもしなくても生きていける。だから人は働かなくなっただんだよ。ついには誰も動こうともしなくなっただだひたすら太陽を眺めてるだけで、次第に身体の機能もそれに合わせて退化していった。ってのさ。それに、植物学者は自分のかかった病氣と植物の有害性に名前をつけてる。人体植物化。って言うらしい。真意はわからんけど、けっこう面白い話だと思わねえ？

あーあと、そのへんと関係のありそうな資料もあったぜ。もうすっかり寂れた小さな病院のカルテよ。カルテってのは名ばかりで、その医者が最後に受け持った患者のことを私情交えてつらつらと書

いてるもんでさ。その患者ってのが、さっき話した植物学者と同じような症例の病気だったらしいのさ。患者の勤め先はどっかの研究所で、そこで扱ってた植物が原因で発症したらしい。それが展望野原の植物なのかはわからんが、まあこの流れからするとそうなんだろうな。医者と患者は幼馴染で、医者はあっちこっち走り回って治す方法を探したんだが、結局見つからなかったんだと。というかその病院のあった町自体が、その植物の影響で何人か死んで全員避難したとかいう話なのさ。それは患者が病院に入った後のことで、患者を置いてきたくなかった医者は意地でもそこに居座ってたらしい。幸い、病院は町からちよつと外れた場所にあったから、そこに居ても死んじまうってことはなくて、そのまま患者の面倒を見てたみたいでさ。そうそう、そんで患者の症状なんだが。症状が進んでくると喋ることもなくなってる、っていうか何を話しかけたり見せたりしても認識しなくなってる。食べることもしなくなって、晴れた日は窓の外を眺めて雨の日は起きもしない。まるで光合成したがる植物みたいな様子だったらしいんよ。結局、きれーに晴れた日にさ、窓辺に身を乗り出した状態のまま死んじまったんだと。そのあと医者は患者を病院の中庭に埋めて、それでも病院を離れようとしなかった。カルテもはや寂しい医者の独り言日記でさあ、今日は患者に何を話したとかそんなんばっかりで。患者が死んだってことが書いてあった後もそんな感じよ。そんである日医者自身も同じ病気が発症して、そっからどうなったかはどこを見てもなかったけど、まあ、死んだんだろうな。

それからー・・・そうだなあ。macnoって男のことがどうしても気になって探したんだよ。一番の資料はやっぱ直接話したっていう植物学者の日記だったな。ってかこれぐらいしかないわ。どの資料を見てもmacnoに関することが書いてないんだ。ボロ小屋の中は生活環境として成り立ってない。ほんとそこら中足の踏み場もないぐらい散乱した何かの本や紙切れに、割れたビーカーやプラスチック。まるでさあ、昔そこが研究所だったかのような感じらしい。実

際、明らか危ない色の薬品が置いてあったり、本はな、科学だの数学だのから何かの物語にそれからカルトなもんまで色々あったらしいけど。けどmacnoがそういう実験器具に手を出したところを見たことはないって言うし、本も目についたのを片っ端から読むからどれを読んでどれが途中なのかもわからないんだとさ。というのも、macnoは目がそりやもう悪いらしい。ていうか見た目からして明らかに片目がオカシイらしいんだけどさ。ながいこと観察してた植物学者が言うに、コントラストがハッキリしてたり動いたりしてるものじゃないと認識してないような感じらしいのさ。例えるならまるで猫みたいだって書いてあったな。んーであと謎なのはmacnoの容姿な。日記にちよっとしたスケッチとメモがあったんだが。服はごく普通のワイシャツにネクタイにズボン、汚れた白衣を着て緑のスリッパをはいて、それから眼鏡をかけてるらしい。ここまでではなんつーか十歩ぐらい譲って普通の科学者だよなって感じだろ？でもなあ、どうやら頭から何の素材かわからない管が生えてるらしいのよ。何のためにあってどんな用途なのかも謎。本人に聞いてみてもわからないって返事しかなかったらしい。結局それっきりのことなんだが、まあなんか・・・明らか人間じゃないよな？思うだろ？

そうそうそれについてよ。もうひとつ気になる資料があったんだわ。これは結構最近のやつで、最新鋭の防護服を装備した調査隊が展望野原に入った時のレポートと証言。と言っても生存者はたったひとりでさ、証言もそれぐらいなんだけど。調査隊は展望野原の植物について研究していた研究所の中から選り抜かれた体力と知識のある若い男が6人ぐらい。てかその研究所には調査やら採取やらを受け持つ行動専門の部があって、そこからさらに選ばれたってんだから相当できる子集団なわけ。ちなみにそんな時の任務は展望野原の植物を持ち帰るみたいなことだったらしい。そんで森の入り口に仮設支部をたてて・・・戻った時に消毒とか必要だからさ。でその支部とは別に本部から隊員の心拍数とかをモニタして、準備は万全なわけ

よ。ところがどっこい。調査部隊から森を抜けて野原に出たって無線がきたのを最後に、通信が途絶えた。と同時に装備の酸素残量がひとりを除いて急激に減少。まるでチューブをぶった切られたみたいにさ。それで数分後にはそのひとりを残して全員の生命反応がなくなつて、そりやもう大騒ぎ。何があつたのかわからないから応援も送れないし、完全に足踏み状態。で、その状態が数十分続いたあと、やつと残ったひとりが目を覚ましたらしく通信に応えた。状況を説明しろって言ったらしばらく沈黙があつて、それから、全滅、つてさ。まあそんなこたあわかつてら。だって本部じゃ確認してたし。んで仲間を運びたいって言うそいつをなだめて支部に戻らせて、こっからが大変なんだ。死体を回収しにいった捜索隊は何を見たと思う？ いや、べつにそんな怖いもんじゃなくて。いやむしろ怖いけど。あのな、死体はどこにもなかったんだよ。出来る限り探したけど跡形もない。まあ、よく見たら、草や花が倒れてて地面を引きずったみたいな跡があつただけど、あんなこともあつたんで捜索は早々に切り上げられた。つてのが、モニタしてた研究員のレポートの内容。んでー、証言なあ。生き残つたのは18才っー若いやつでさ。奇遇なことにモニタしてたやつの子だったらしい。親子の絆が起こした奇跡みたいなの？ そんでそいつが言うに、なんかもう一瞬すぎて何も覚えてないんだと。まあ、そうだろうなあつてことでそれっきりらしい。でそれ以来展望野原の調査は凍結。今もそんな話聞かないしな。あ、でも、支部に戻る時、背後から足音がしたような気がーって曖昧なのはあつたな。振り返らなかつたらしくて何か見たわけじゃないからちょっとしたメモ書きみたいな感じだったけど。

でさ、これは俺の考えなんだけど。死体を引きずつてつたのはmacnoじゃねえ？ と思うんだよ。生き残つた奴が去つてくときに出てきてさ。いや、でも、それにしたって防護服にボンベ背負つた人間をそんな短時間で全員見つからない場所まで運べるとは思えねえけど・・・それに意図がわからんよな。関わったやつら全員死ぬだ

の、死神じゃあるまいし。でも調査隊のそいつは全くの無事で胞子の影響も受けてなかったらしいから多分今でもピンピンしてんだよなあ。なんでそいつだけ助かって……あーもうわからん。

喋りすぎで腹減ったわ。焼き鳥たのんでいい？

うん、で……なんだっけ。そうそう、色々読んでみたんだけどさ、まあ結局何もわからなかったわけよ。お前も思うだろ？よくできた話だ。ってさ。

侵蝕

何か大きく黒いものがこの町を覆った。

それは雨雲だった。

雲は北のほうからやって来て、雨を降らせた。

雨は六日間ものあいだ降り続いて、七日目に太陽の光が降り注いだ。

けれど、明るくなった町に、人々が出てくることは二度となかった。

雨の間まばらに町を歩いていた人の影は、七日目にぷつぷつりと姿を消した。

八日目の朝、僕は家を出た。大きな荷物を背負って。

町はほんの一日の間で植物に侵食されていた。

まるで大昔に人がいなくなって、忘れ去られた廃墟みたいに。

半分ぐらいはほんとうだ。

人がいなくなつて、僕もここを去って、たった今、この町は廃墟になった。

・・・どうして。

僕だけがこうやって今までどおり歩いているんだろう。

記憶も、意識も、なんだか全部がぼんやりしている。

夢を見てるのかも知れない。

道のむこうに、白い髪の女の人が見込んでいます。

「ねえ、あの、何してるの？」

「ここに埋めたんだよ」

「何を？」

「そこに病院があるでしょ？」

私はそこで助手をしてたんだけど、お医者様が亡くなっちゃったのさ」

「そう・・・」

女の人が手を合わせて、僕もそれを真似た。

「私、どうして生きてるんだろうね」

「それが僕もわからないんだ。これが夢だと助かるんだけど・・・」

「あんた、どこから来たの？」

「南のほうだよ」

「そう、遠いところから歩いて来たんだね。」

・・・うちで休んで行かない？うちと言っても病院なんだけど。」

僕は頷いて、女の人のおあとをついて行った。

中庭をまるく囲うような形の病院は、植物に覆われていて、とても大きい。

低い扉を開けて中庭に入ると、そこにも何かを埋めた跡があった。僕たちは中庭をつきつて大きな扉をあけて、病院の中に入る。

誰もいない、薄暗い待合室。重い扉が背後で音を立てて閉まった。

雑草

北の森には幼い姫と、ひとりの男がいる。

姫というのは城で王様のもとにいるものだけど、その男は王様でも側近でもない。では誰か。

ずっと昔、王国の城に仕えている庭師が言った。

『近いうちにこの国は植物によって支配されるでしょう』

王様は取り合わなかったが、庭師は主張した。

『植物は学者たちが思っているよりもずっと凄まじい勢いで増えています。僕は学者たちよりもずっと植物について詳しいでしょう。庭師ですから。ところでいかがいたします？ いえ、ほら、庭師は鋏も持ってますからね』

次の日、この国が目覚めることはなかった。

国民全員、王や側近までもがいなくなったこの国には、北からやってきた植物たちが腰を落着けた。

他に誰もいないわけではないが、たったふたりきりだ。

そのふたりは今、王の間にいる。

奇形の姫君は元王様の首があった場所から咲いているサイネリアを見ていた。

『お父様はよかれと思って私を閉じ込めたんだよ。ここまでしなくてよかったのに』

『外へ出たいと言ったのは誰？それに、僕の言ったことは嘘じゃない』

『でも私、陽にあたるのが怖い』

姫の心配をよそに、丁度王国から見る空は黒い雲に覆われて、それは雨を降らしていた。

しかし雨は傷に沁みるので、姫は庭師に上着を借りて外に出た。

赤子のような足では歩くのも一苦労だが、庭師は手まで貸してはく

れない。

庭師の手は花に水をやるためにあるのだ。

『雑草は刈るべきだけれどね』

『それなら、私だって雑草なのに。』

庭師は答えなかったが、確かに雑草のない場所には綺麗な花が咲くらしかった。

黒い雲は北の森へと伸びていて、ふたりはそれを追う様に歩いた。

空想

北の森には幼い姫と、ひとりの男がいる。

姫というのは城で王様のもとにいるものだけど、その男は王様でも側近でもない。

男は毎日、小屋の周りに咲いている花を手入れして、お茶を淹れて、時々お菓子を焼いた。

姫の方は大人しい。毎日、花の手入れをしている男を眺めて、お茶を飲んで、時々お菓子を食べる。

幼い姫は産まれた時から奇形だったので、外に出たのは初めてのことであった。

だらんとたれた尾は本来ないはずのもので、それは病気の王女から産まれたがための不幸だった。

その王女も今はあの花園で綺麗な花になっていることだろう。

森での生活はこの上なく平和だった。

この小屋は森の魔女が遺したものに違いない。

姫はそんな空想に思いを馳せるのが好きだったが、あんまりぼんやりしているので時々男の話を聞いていなくて、その度に叱られることがあった。

その日、朝から男の姿が見えたらなかったので、姫はテラスの椅子に座って、いつも男が手入れしている花をぼんやりと眺めた。

しばらく眺めていると、木々の間から人影がでてきた。彼ではない。彼よりも少し背の低くて若い青年は、テラスの前まで来ると驚いた顔をした。

『君、どこから来たの？ここは僕の家なんだ。ずっと空けてて・・・
・・・ねえ、もしかして花を手入れしてくれた？とても綺麗だから

吃驚したよ』

青年が喋ったので、姫はこれが自分の空想ではないと気づいて、慌てて返事をした。

『あ、あの、私……その、ちがうの。お花の世話をしたのは庭師さんだよ。ええと、その、勝手にお家を使ってごめんなさい・・・』

『そんな。謝らないで。もうひとりいるの？今はいないのかな。少し話さない？夢みたいだなあ、この森に入ってくる人がいるなんて。このティーセットは君の？使ってもいいかな。』

青年は嬉しそうにニコニコ笑って、花柄のティーポットでふたり分のお茶を淹れてテラスのテーブルに置いた。

姫はというと、この小屋が魔女の遺したものではないということに少しだけがっかりして、でも青年との出会いにとってもわくわくしていた。

あんまりにわくわくしてふたりとも夢中だったので、いつの間にか戻ってきた男に気づかず、彼の話を聞き逃したのはちょっとした事故だった。

『ねえ、今の聞いてたかい？雑草は刈るんだよ。わかるね』

回送

びくりと体がはねて目を覚ました。

飛び出そうなほど鳴る心臓。吹き出る冷や汗。詰まった息を吹き返す。

見開いた目が見るのは、涙でにじんだ薄暗い天井。
何？どうしたの？

動けないでいると、何か大きく暖かいものが俺の視界を覆った。
それは父さんの手だった。

「うなされてたぞ」

怖い夢を見た。よく、覚えてないけど。

ガキじゃないんだから、と父さんは呆れた。

「熱計るか？」

「知らない・・・ねえ、保昭は？」

「四時だな。もうすぐ戻るだろ」

父さんは俺の額から手をどけると立ち上がって、部屋を出て行った。
薄暗い部屋。ドアが音を立てて閉まった。

カーテンを開けていってほしいって言えばよかったかなあ。

棚の上に置かれた猫の人形も、気のせいか心細そうに見えた。

微熱が心地よくてうとうととして、玄関のドアが開いた音には気づかなかった。

「ところが、俺は物語が書けないんだ」

淹れたばかりの熱い珈琲を目の前の机に置きながら、友達はそう言った。

熱い珈琲のカップから解放された手はそのまま横に置いてあった分厚い本を取り、古くなった厚い皮の表紙をめくって、それからさらに2、3ページめくった。

めくったページの数に意味はない。めくるという行為自体にもそれは同じだった。

何故ならその本には何も記されていない。

友達は、ただひらいたページを眺めて、閉じた。

「あの部屋に置かれた花のサンプルは見たか？まさかケースは開けてないだろうな。

ここにあった本によれば、あの花はフィールドの時代にあったものらしい。

そしてこれがフィールドの接続書だ。」

閉じた本の表紙に書かれた文字を見る。間違いないらしい。けれどこの接続書がフィールドへ繋がることはなかった。

「誰かが本の文字を消したのか？」

「そう考えてる」

「他に方法は？」

「行ける時代で、他の接続書を探す。

もし誰かが今もフィールドにいるのなら、そこへ接続するのに使った接続書があるはずだ。

幸い、ついこの間もフィールドから生命反応を受信した。必ず何者かがいるはずだ」

「でもよ、もしその接続書も何らかの方法で破棄されてたらどうする」

「残っている本からフィールドについてを推測して、新しい接続書を書く他ない」

「ところがお前は物語が書けない。っと」

友達はうなずきながら席を立った。

俺は部屋を見渡す。

この部屋にはとにかく本が多い。そのほとんどを俺は読めない。特殊な言語と文字が使われてるらしい。

ただ、その文字が使われた本は、読めなくとも特に問題はない。接続書は、読むよりも接続して実際にその場所を見るためにあるものだ。

ということを先日、友達に説明された。

この時代が観測されたのが丁度5年前。それまで、友達は研究所で日夜ひたすら花の研究をして、俺は研究所の医務室で日夜ひたすら研究員たちの面倒を見てた。

あの研究所は急患が多い。毒性のある植物を研究する場所で、扱いを誤った研究員が運ばれてくる。

友達もそのうちのひとりだった。友達はその事故で左目を失ったが、懲りずに今も花を相手にしてる。

俺も相変わらずやってることは同じで、違うのは場所ぐらいだ。

今友達はこの時代で、日夜ひたすら花の研究をしていた。

「研究所ではまた死人が出たってさ」

「ここの植物も安全じゃない」

「そうだな。安全じゃない」

今俺はこの時代で、日夜ひたすら友達の話し相手をしている。

霧海（後書き）

MYSTというゲームへのオマージュです。オリジナル作品として問題があれば削除します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2986j/>

植物

2010年10月28日03時24分発行